

論壇

——「共に生きる」地域再生の小さな拠点に

他者の「今ここで私にできる」とを見つけ、挑戦

仙台白百合女子大学はビジョン2030を掲げ、四つのゴール「いのちを守る」「共に生きる」「よりよい世界を」「明るい地球の未来へ」のもと八つの課題SSGs (Sendaishirayuri Goals) を策定し、全学的に取り組んでいる。この命名はSDGsの実現に向かう国際社会との連帯の表明である。

SSGs推進のエネルギー源は建学の精神にある。創立母体のシャルトル聖パウロ修道女会は、3世紀にわたり新約聖書の主要執筆者パウロの「すべての人にすべてとなる」Be All to Alls」という壮大なビジョンを描いてきた。今日の前にいる一人のために全身全霊を尽くす。1世紀当時の「世界」を舞台に活躍したパウロは、そうしてローカル人財の先駆けとなった。この精神は学校法人白百合学園の教育の根幹に据えられている。

仙台では1966年の開学以来、地域と共に歩み、社会に貢献する女性を数多く輩出し

てきたが、時代のニーズに応え、地域の声に聴きながら、短大から四年制大学への昇格、学科改組など革新を続けてきたからこそ、今の地に存続しているのだと思う。人口減少が加速する地方でも逆風に帆を張り、地域の方々に必要とされる限り、未来はあると信じている。

地域貢献は本学のミッションである。実施主体は、所轄センター、学科、教員の担当科目・ゼミなど多様であるが、その取り組みの一端をここで紹介したい。

キャンパス内で月一回のペースで十年前から開催している「ゆりっこ広場」は、初等教育からスタートした白百合ならではの地域貢献である。0歳未満園の子どもと保護者を大学に招待し、おもちゃでの遊びやふれあい遊び、絵本の読み聞かせ、さつま芋の苗植え・芋ほり、夏祭り、クリスマス会などを行っている。子ども教育学科の学生が企画・運営しているため、参加する親子と触れ合うことによって、子育て支援をしながら、同時に

保育者を目指す学生の実践的な学びの場ともなっている。また、英語あそび、感覚あそび、食育等をテーマに本学教員が子育て講座を開き、大学の知財を社会還元している。

仙台市泉区が地域課題解決を支援する事業「いずみ絆プロジェクト」の助成を受けた活動は多岐に及ぶ。健康増進のためにシニアと学生が一緒に軽運動を楽しむ「しらゆり健康倶楽部」、ヨガ、小学生対象のロボットプログラミング、東北で技能実習生として働くミヤンマー・ベトナムの女性たちへ防寒着を贈るクロス・ドライブ、外国人への日本語教育など、16件の活動を展開している。

東日本大震災で打撃を受けた宮城県南三陸町とは観光協会と連携協定を締結している。グローバル・スタディーズ学科の学生が南三陸311メモリアルのパナーを英訳し、観光物産展開催を手伝い、インターンシップ等に参加させていただいている。同協会主催のツアーでは、台湾の大学生が本学を訪問し、在学学生との交流会が実現した。観光振興が経済の活性化に寄与し、震災復興に直結することは言うまでもない。

東北唯一の自立持続可能な自治体として確

進する大衡村の小川ひろみ村長は本学出身である。昨年は大学祭での講演を機に本学クリスマスバザーで大衡村の特産品が販売された。今年は村の「食の学び舎事業」に本学学生の「八自史」を書く。企画が採択され、今後の連携が期待される。

この他、姉妹校との高大連携を活かした子ども食堂、貧困世帯の子どもたちに食料を提供するフード・ドライブ、防災教育の絵本製作と防災意識の啓発活動、企業との食品共同開発など、他者のために「今ここで私にできること」を見つけ、挑戦している。

今年度は地域貢献・高大連携・学修支援の3部門からなる総合センターを新規開設する予定である。大学で親子の絆を深め、シニアに憩いの場を提供し、異世代間交流が生まれる。地域と大学それぞれ固有の資源と機能がクロスしてシナジー効果が発揮される。そのうねりが地域に新たな息吹をもたらし、若者にとっては人間的成長のまたとないチャンスとなる。本学がそのように多種多様な人々が「共に生きる」場として、地域再生の小さな拠点になることを願っている。